

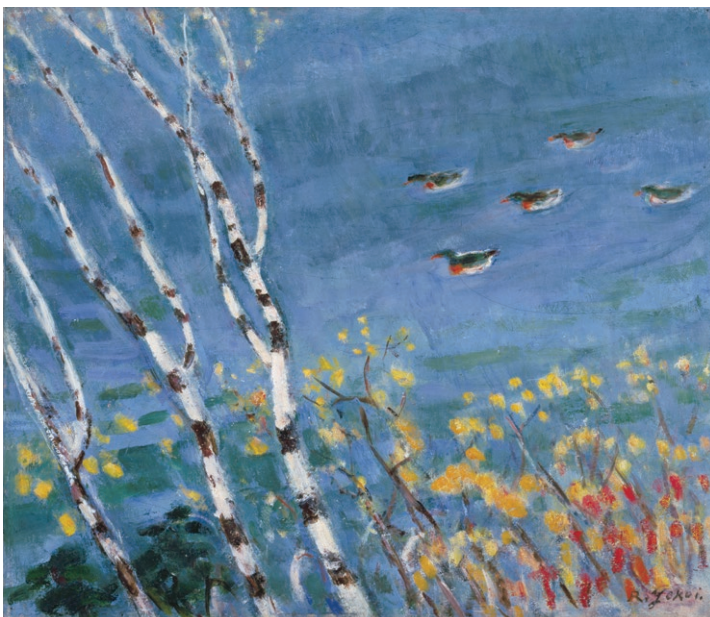
木村定三コレクション横井礼以作品目録より



No.19 《三つ面》 KT11



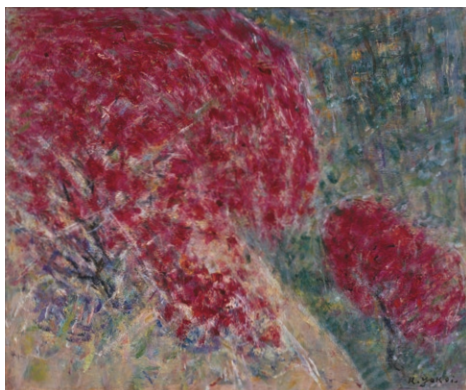
No.2 《茄子之図》 M2061



No. 5 《鴨のうかぶ湖（琵琶湖）》 M2659



No.22 《鶉》 M2647



No. 9 《山つつち》 M2645



No.16 《菊》 M2656



No. 4 《落霜紅》 M2644



No.20 《梅日和》 M2654



No.21 《室生寺の塔》 M2660



No.6 《石楠花》 M2658



No.17 《真鶴》 M2643



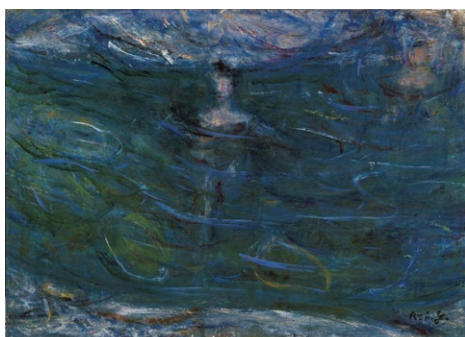
No.10 《水にうつる大山》 M2646



No.11 《城ノ崎温泉 雨後》 M2648



No.15 《かもめの飛ぶ東郷湖》 M2657



No.18 《水浴》 M2653



No.12 《山陰山村》 M2649



No.3 《パンジー》 M2655



No.14 《綿羊》 M2652



No.8 《洋蘭》 M2651



No.13 《龍膽》 M2650

木村定三と横井礼以

石崎 尚

愛知県美術館（以下、当館）の所蔵する木村定三コレクションには、20点の横井礼以作品と、横井から木村に宛てた4通の書簡が含まれている。20点という数は熊谷守一や尾崎良二らと比較すると決して多いとは言えないが、近代以降の作家の中ではある程度のまとまりを持った作品群と言えるだろう。今回、横井作品の目録を作るにあたって、改めて作品を精査した。ここでは調査で判明したことなどを踏まえて、木村定三コレクションにおける横井作品の位置付けについて考えてみたい。なお、横井については、名古屋画廊が発行した『横井礼以画集』¹がその資料性において特筆すべきものとなっている。本稿でも同書およびそこに収録された山田諭の論考に多くを負っている²。なお、横井は1954年に雅号を禮市（れいいち）から礼以（れいい）に改めたが、本稿及び作品目録では全て礼以で統一した。ただし、書簡の翻刻は原文に従った。

横井礼以（本名、禮一）は、1886年10月1日に愛知県海西郡弥富村（現在の弥富市）に生まれた。三重県立第二尋常中学校（現在の三重県立四日市高等学校）を卒業後、上京して白馬会洋画研究所に入って絵を学ぶ³。同所で1年間学んだ後、1907年に東京美術学校西洋画科本科に入学。一つ上の学年には藤田嗣治と、加藤静児がいた。加藤の生まれた愛知県海部郡十四山村（現在の弥富市）は、横井の弥富村からほど近い。同校で黒田清輝から学んだ横井は1911年に卒業。この時、同期にはやはり愛知県出身の人見彌（ひとみ・わたる）がいた。後に横井は緑ヶ丘中央洋画研究所の指導主任となり、人見は人見彌洋画研究所を設立し、二人とも後進の育成に励むことで愛知の洋画壇の土台を作っていく。

卒業の翌年から第1回光風会に入選、その2年後には文展（第8回）に初入選するなど、画家としてのキャリアは順調な滑り出しを見せていた。だが、1916年の第10回文展には落選してしまう。画家自身の言葉を引こう。

二科が創立される前後、当時文展という官展がありましたが、私も二度程出品していました。美校卒業が二十五、六才だから、三十前後の頃だったと記憶します一。

三度目に出す頃、私はマチスの影響をうけて、「新らしい風」に吹かれていましたから、所謂新らしい作風になっていました。当然のように文展は落選しました。

1 『横井礼以画集』名古屋画廊、2016年。

2 山田諭「横井礼以の芸術：融通無碍の絵画世界」『横井礼以画集』名古屋画廊、2016年、8～16頁。

3 この研究所の自由奔放な雰囲気は、下記に活写されている。横井礼以「私の青春②」『美術館ニュース窓口』第25号、愛知県文化会館美術館、1957年、8頁。

それから二科展に出品するようになったのです⁴。

横井が述べるように、当時の新しい傾向に同調するものたちは二科に出すのが習わしだった。果たしてこの転換からの影響があったのか、文展落選から二科展に切り替える狭間の1917年頃から本名の禮一ではなく、「禮市」という雅号を用いるようになる。二科の初入選が32歳の時。これ以後、官展とは離れ一貫して在野で活動していくこととなる。

二科に移ってからの横井は早くも頭角を現していく。初出品の第5回展（1918年）では林倭衛、鍋井克之に横井を加えた新人三人に一室が与えられて特陳の榮譽を得る。さらに二度目の第6回展には5点を出品し、二科賞を受賞。これによって会友に推挙されたのだ。だがその一方で、私生活においては大きな悲しみが訪れる。1921年の年末に、長男の日景留（かげる）が病のため、2歳という幼さで命を落としてしまう。日景留をモデルにした《蜜柑を持てるK坊》を描き、つい数か月前の二科展に出品したばかりのタイミングである。横井自身はこのことについて特に言葉を残してはいないし、同時期の作品に顕著な影響は見られないが、それでも親としての衝撃は計り知れないものがあったことだけは間違いない。

1927年、41歳の時に横井の愛知時代が始まる。小さい頃から患っていた目の病気が悪化し、手術と入院を経て、療養のために愛知県知多郡河和町（現在の知多郡美浜町河和）に移り住んだのである。と同時に、名古屋の美術界はこの若き俊英を放っておかない。すぐさま松坂屋を会場として「横井禮市氏洋画個人展覧会」が開催され、この初個展には60点もの作品が出品された。その3年後には、名古屋市千種区蝮ヶ池に緑ヶ丘中央洋画研究所を設立し、自ら指導主任となる。名古屋の画壇のために相当な意気込みでこの研究所を立ち上げたはずだが、そこには大阪の信濃橋洋画研究所の雑誌『マロニエ』に携わった経験も生かされていたことだろう。鍋井や中川紀元らが画家志望の若者たちを指導する様子を見て、いずれこのような研究所を名古屋にも、と思いを抱いていたのではないだろうか。鍋井と中川の二人は、戦後の二紀会の創立を共にすることになる、横井にとっての盟友ともいえる画家であった。

木村定三との出会い

さて、そうやって着実に愛知で地歩を固めていった横井であるが、木村定三はどのようなして横井を知り、そして作品を集めるようになったのであろうか。コレクターとしての歩みについて、木村自身の言葉をいくつか引いてみよう。

私は昭和十一年東大卒業以来家庭の事情から郷土名古屋に在住し、アマチュアとして美術の研究に従事し、私の一生の念願としては、既往画家の格付をしようと言う大望を抱いて

4 横井礼以「作家の記録 日本こそ最も仕事のし甲斐のある位置」『美術ジャーナル』復刊第7号 73-05号、美術ジャーナル発行所、1973年、21頁。

いる者であります。研究は必然的に蒐集を伴い、現在まで大体二十年間に、書、画、陶器、仏像、金石に渡り数多くの物を集めました。刀剣と版画には余り興味を感じないので之は私の研究と蒐集の対象外です。(中略) 魚釣りの方に、「魚釣りは鮒釣りに始まり、鮒釣りに終る」と言う言葉があるが、私の書画遍歴は、「熊谷守一に始まり、熊谷守一に終る」と言う事になりそうです。私が最初に熊谷さんに会い、その作品に接したのは、昭和十三年に名古屋の丸善の画廊で、第一回の日本画の個展をなさった際ですから、今から二十年程前のことであります。それまでは熊谷さんの名前も知らなかったのですが、画廊で画を見て全く感心しました⁵。

1938年12月に熊谷と出会った木村は、これ以降収集活動を本格化させていく⁶。翌年には熊谷の二科出品作《麦畑》を入手し⁷、1942年には長谷川利行の作品を初めて買っている⁸。横井も1942年に丸善で個展を開催しており⁹、恐らく木村とはこの前後で接点があったのではないだろうか。熊谷は横井と親しい間柄で、名古屋に来る際は横井家に泊まっていたというから¹⁰、熊谷経由で知り合いになったということも考えられる。

木村定三による横井作品の収集

さて、木村定三コレクションには、横井から木村に宛てた書簡が4通含まれている(M2917)。また、今回の調査の過程で、横井の遺族から名古屋市美術館に寄贈された資料のなかに、木村からの書簡が3通(うち2通は熊谷守一展の案内状)見つかった。合計7通という数は決して多くはないが、木村と横井の交流を考える上で重要度が高いと判断し往復書簡としてまとめた(001(47)～004(44)頁)。

また、木村は自身のコレクション歴を手帳に控えており、現在では当館が所蔵している¹¹。これを見るといくつかの横井作品も、木村が買い求めた年が判明する。本稿では主にこの書簡と手帳を参照しながら、木村と横井の交流について明らかにしていきたい。

書簡の中で消印の日付が一番古いものは、横井の個展の開催を知らせる案内状とその出品目録である。個展の会期は1939年11月8日から11日まで、場所は熊谷の個展と同じ丸善である。案内状ではあるものの横井自身が宛名書きをして木村に送っている、これ以前から二人の間には交流があったのだと思われる。丸善は当時、松坂屋と並んで木村が作品をよく買った画廊である。前述のとおり熊谷との出会いを生んだのもこの丸善で、木村

5 木村定三「私の書画遍歴 20 価値判断の物指」『南画研究』第2巻第12号、1958年12月、8頁。

6 1938年12月21日から25日まで、丸善で開かれた「熊谷守一先生新毛筆画展覧会」にて木村が作品を購入した。

7 木村定三「熊谷守一の人と芸術」『新美術新聞』1972年11月1日号、美術年鑑社、3面。

8 木村定三「長谷川利行の芸術」『長谷川利行展』中日新聞社、1979年。

9 1942年4月21日から25日まで、丸善で横井禮市画伯油絵展覧会が開かれている。下記を参照。『新愛知』1942年4月21日朝刊4面。ちなみにこの横井展の一つ前の丸善の展覧会が、木村が見た長谷川利行展であった。

10 横井礼以「生活にじみ出る」『毎日新聞(中部本社版)』、1976年10月7日夕刊1面

11 この手帳は2021年に寄贈された。概要については下記を参照。足立好弘・長屋業津子「特別寄託『木村定三氏手帳等の資料』について」『愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編』第24号。足立好弘「手帳等を手掛かりに見る熊谷作品群形成の軌跡」『愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編』第25号。

とは縁の深い画廊と言えるだろう。熊谷、横井、長谷川はいずれも二科展で発表した作家だから、この頃の木村は二科会の作家に関心を持っていたようだ。この個展で木村は《茄子之図》を買い求めている。この作品は紙に墨で描かれたもので、「横井禮市先生が珍しくも初めて試みられたる」とあるように、初めて墨と筆で描いた出品作の一枚だ。この個展は「横井禮市先生 新毛筆画展覧会」と題されており、ほぼ一年前に開催された「熊谷守一 新毛筆画展覧会」と同様の主旨のものだろう。熊谷の日本画展が好評を得たことに気をよくした丸善の企画第二弾という訳だ。熊谷にとってはそれが長いスランプから脱するきっかけとなったのだが、油彩画家が日本画の画材を用いて絵を描くのは、総力戦へと突き進む時局に沿うものでもあったろう¹²。現在確認できる横井の毛筆画は少なく、結果的にこの《茄子之図》の希少価値を高めている。ただし本人としては水墨画を重視していたようで、下記の言葉を残している。

水墨画は楽しいものです。以前から毎年暮になるとよく新聞社などから色紙の依頼を受けたりするので、その余勢を駆って一シキリ水墨画に親しむのが常です。何うも油絵と水墨画とでは材料から気構えに至るまでまるで正反対のようなものですから、それに耽るためには少し続けて描いた方がよいと思います。いずれにしても水墨画の世界は亦私にとっては可成り重要な一要素となります¹³。

手帳によれば翌年、木村は横井の《パンジー》を丸善で購入している。これは2号サイズの小品ではあるが、購入時期を考慮すると重要な作品である。というのも、木村の作品収集は1938年頃から本格化したと考えられるが、初期の収集品は村瀬太乙、岡本柳南、小川芋銭、登内微笑らの日本画家を中心として、そこに一部の工芸作品が加わる程度だからである。先に引用したように1939年に熊谷の《麥畑》を入手しており、木村が手に入れた洋画作品としてはこれが最も早い。《パンジー》はこれに次ぐ早い時期のもので、日本画と工芸から始まっていた木村の収集が、徐々に洋画にもその範囲を広げだした時期の作品という点において、《パンジー》は《麥畑》と並ぶ重要性を持っているのである。また、村瀬や岡本などの物故作家の作品ではなく、まだ作家本人とやりとりすることが可能な現存作家の作品という点も、この時点の木村にとっては重要であったと考えられる。

手帳の表記について

翌1941年には《石楠花》を購入している。この件については往復書簡にやり取りが残っているので事の成り行きがよく分かる。要約すると、志賀高原の絵と《石楠花》の2点を木村が1号あたり30円という価格で購入し（つまり6号の《石楠花》は180円）、その代金

12 横井のこの展覧会を知らせる記事の中には「近來洋画壇の新毛筆画は非常に歡迎されてゐる折柄」という文言が見られる。「新毛筆画展 横井画伯の試み」『新愛知』1939年11月7日朝刊5面。

13 横井礼以「作者の言葉」『横井礼以画集』三彩社、1960年、ノンブルなし。

を送った。横井はその代金を無事に受け取った礼を送っている。

ただし、この作品は手帳では1947年の入手として記載されており、書簡の時期と6年の差がある。この差をどう考えるのかが悩ましく、本稿および目録では作品の制作年について、以下のような扱いとした。

1. 初出の展覧会が明らかな場合はその発表年を制作年とする
2. 書簡で確実に木村が入手した年が突き止められるものは「〇年頃」とする
3. 書簡に記載がない場合、手帳の記載年より以前の制作年とする

2のケースは書簡によって木村が入手した時期は明らかだが、制作してから木村が入手するまでのタイムラグを考慮して「年頃」という表記にする。問題は3のケースである。木村の手帳は、ある段階で自身のコレクションを整理する目的で用いられたような形跡がある。なので例えば手帳に1947年とあったとしても、後から振り返って記入した例が少なくないようだ。無論、木村亡き今、それ自体を確認する術はないが、手帳に1947年とある場合には、少なくともそれ以前には制作されたと考えて差し支えないだろうから、作品の制作年は1947年以前としておくのが無難だろう。

《石楠花》の場合は2にあたり、制作年は1941年頃としておく¹⁴。手帳の記載年がそのまま信用できないとすると、それはそれで厄介なことではあるのだが、手帳の内容については今後も別の作家の資料などと照らし合わせることで明らかになることを期待しつつ、今後の課題としたい。《石楠花》は当館に引き継がれているものの、同じ書簡で言及のある「志賀高原の絵」に該当しそうな作品が見当たらないので、どこかの時点で手放したものであると思われる。ちなみに、1940年の横井禮市氏洋画展（阪急洋画廊、大阪）の目録には《志賀高原よりアルプスを望む》、《白樺の芽出し（志賀高原）》などのタイトルがあるところから、どちらかを木村が入手した、ということも考えられよう¹⁵。

注目すべきは《石楠花》に対する木村の論評である。「《石楠花》を部屋に飾って毎日見ているが、見るたびに気分が新しい名品である」と書き、「是非近い将来、花の絵を集めた個展を開いてほしい」とも述べる。木村の旧蔵品のなかには《落霜紅》、《山つつぢ》、《龍膽》、《洋蘭》、《梅日和》、《パンジー》など、《石楠花》を含めて計7点の花を描いた作品が含まれており、横井作品全体の3分の1を占めている。これは、花の作品に良品が多いと木村が考えていた結果と考えていいだろう。作品はどれも《石楠花》同様に小ぶりなサイズが多く、気軽に部屋に飾って楽しんでいたのではないかと想像される。

書簡の中で「お言葉に甘えて一号あたり30円で計算した」という表現が出てくるので、この時点ですでに横井から割引について申し出て、木村の方でも「お言葉に甘えてもよい」

14 書簡に言及のある《石楠花》を1941年に購入し、また別の《石楠花》を1947年に買ったということであれば書簡と手帳の内容も矛盾しないが、本稿ではその考え方は採用しない。

15 1948年の横井禮市画伯近作展（東海銀行津島支店）には《志賀高原》の出品が見られる。

と考える間柄であったことがうかがわれる。名古屋在住の木村としても、同じ名古屋の作家を支援したい気持ちがあったのかもしれない。ちなみに横井は木村より27歳年上であり、熊谷守一とはほぼ同世代(熊谷が6歳年上)である。熊谷に対しては「100枚まで作品を買う」という主旨の発言があったようだが、横井に対してはどのような接し方をしていたのかが気になるが、二人とも思い出話の類を残していないのが残念でならない。

もう一つ書簡のやりとりから明らかになるのが、《鴨の浮かぶ湖(琵琶池)》(M2659)と《櫻》をめぐる経緯である。書簡の消印が判読できず、手帳記載の購入年から1941年の出来事と思われるのだが、この年の5月頃に木村が《鴨の浮かぶ湖(琵琶池)》を購入したようだ。その画料を受け取ったというのが書簡の内容だが、合わせて《櫻》を高島屋で展示する旨の連絡があるので、この作品についても木村から問い合わせがあったようだ。続く書簡では木村が入手を希望していた《櫻》が、先に売約済みとなったことが記されている。これもやはり花を描いた絵ということで関心を抱いたのだろうが、生憎他人の手に渡ってしまったようだ。

《櫻》を巡るやりとりの少し前のことだが、1941年4月22日から26日まで丸善で「趣味の陶画三昧展」が行われている。熊谷と横井に加えて北川民次の三人が、瀬戸で絵付けをした作品の展覧会である。この展覧会にまつわる書簡が熊谷と木村の間で交わされていることから¹⁶、木村が展覧会を訪れてそこで横井に会ったことは十分考えられる¹⁷。

書簡や手帳などから明らかになる木村と横井の交流を、時系列で整理すると以下のようになる。

- | | |
|----------|--------------------------------------|
| 1936年3月 | 木村、東京大学を卒業し名古屋に戻る。この頃から美術の研究を始める。 |
| 1938年12月 | 木村、丸善の個展で熊谷守一と出会う。 |
| 1939年11月 | 木村、丸善の個展で横井の《茄子之図》を購入する。 |
| 1940年5月 | 木村、横井の《鴨の浮かぶ湖》を購入し、代金を支払う。 |
| 1940年頃 | 木村、横井の《パンジー》を購入。 |
| 1941年1月 | 木村、横井の《石楠花》を購入し、代金を支払う。 |
| 1941年4月 | 熊谷、横井、北川による「趣味の陶画三昧展」。 |
| 1941年6月 | 木村、横井の《櫻》を希望するが入手叶わず。 |
| 1942年 | 木村、横井の《落霜紅》を購入。 |
| 1955年12月 | 木村主催の熊谷守一展の案内状を横井に送付 ¹⁸ 。 |

16 下記を参照。石崎尚「愛知における木村定三と熊谷守一のネットワーク」『愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編』第23号、愛知県美術館、2017年、99～101頁。

17 「趣味の陶画三昧展」を企画した東本春水は、名古屋新聞社の鈴木夢平と共に1940年7月に双弦会を結成した(創立展を7月16日から18日まで丸善で開催)。この創立展以降、東本が関わる展覧会に横井は度々、賛助出品しており「趣味の陶器三昧展」もその一環として行われた模様。鈴木は挿絵、童謡詩など幅広く活動した。「中京美術界 双弦会創立展」『名古屋新聞』1940年7月16日朝刊5面。

1957年1月 木村主催の熊谷守一展の案内状を横井に送付。

木村が、自身のコレクター人生の最初の出来事として繰り返し言及するのが、熊谷守一の丸善での個展である。その一年後に《茄子之図》を購入した横井の個展が開かれた。また、現在明らかになっている書簡のやりとりとしては、1957年1月に木村から横井に送った熊谷個展の案内状が最後である。また、木村が所蔵していた作品で最も制作年が後のものは1958年作の《鶉》なので、少なくとも1958年前後までは二人の交流があったものと考えられる。

コレクターとして歩み始めて間もない時期に横井の作品を入手し、その後も長く交流が続いたことから、木村定三というコレクターにとって横井は重要な位置を占めていたと考えてよい。木村が心酔する熊谷の弟分のような存在であり、かつ名古屋在住の作家という点も好ましかっただろう。

木村定三コレクションにおける横井作品

木村定三コレクションの20点の横井作品を概観すると、水墨画の《茄子之図》、水彩の《菊》、クレパスの《室生寺の塔》を除いた17点は全て油彩作品である。サイズは20号の《三つ面》が最大で、他は6号や4号など小振りのものが多い。このことから、木村は二科展や二紀展などに出品された大作よりも、比較的小さめの作品を好んで入手していることが分かる。《石楠花》を部屋に飾って毎日眺めている旨の記述が書簡にあったが、木村は自宅に飾って丁度いいサイズのものを選んでいたのかもしれない。

また、画題に関しては風景画と静物画（特に花）が大勢を占めており、人物画は1点も含まれていない。横井自身も様々な画風の変遷があるので、木村の好みがどのような点にあったのかは一概には言えないものの、横井の《鶉》に関する深山孝彰の指摘は参考になる。深山は木村コレクションの戦後の洋画作品にいくつかの共通点を見出し、横井の《鶉》を「暗中の同族集合」というグループの一つに数えた¹⁸。《鶉》は5羽のウズラを闇に溶け込むように描いた作品だが、他にも《水浴》や《山つつづ》、《綿羊》など、「同族集合」とまでは言えないものの、暗い画面の中に判別しがたいモチーフが描かれる作品がいくつか確認できる。これらは二科や二紀の出品作に見られるような、明快な色面で区切られた作品群とは一線を画している。《鶉》を始めとするこのタイプの作品の収集には、木村の独特な好みが反映されているのかもしれない。

なお、作品の多くが1974年の「米寿記念横井礼以自選展」に出品されている。これは木村が懇意にしていた大阪フォルム画廊が主催し、東京店と名古屋店で開催したもので、借

18 この案内状はかつて木村と熊谷の往復書簡をまとめた際に、1960年のものとして掲載したが、今回消印で確認できたため1957年に訂正する。石崎尚・福井淳子（編）「木村定三と熊谷守一をめぐる往復書簡（翻刻）」『愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編』第23号、愛知県美術館、2017年、024（108）頁。

19 深山孝彰「木村定三コレクション 戦後の洋画作品から窺うモチーフやイメージの好み」『愛知県美術館研究紀要 木村定三コレクション編』第27号、2021年、26頁。

用の申し出に木村が快く応じたものと思われる。木村定三コレクションの当館への寄贈は2001年度から始まったが、寄贈が始まる前の最初期の11点の寄託作品に横井の《三つ面》が含まれている。こうしたことから木村にとって横井という画家がいかに重要な存在だったのかがうかがい知れよう。

おわりに

横井礼以という画家はその生涯において、様々に画風を変化させた。画家として順調にキャリアを重ねた彼は、一目見て「横井風」と言えるような強い個性を持った作家ではない。しかし、愛知県において多数の洋画家を指導し、この地に洋画を根付かせた功績は極めて大きい。また、愛知県文化会館協議会委員を長く務めるなど、当館との縁も深い作家である。木村定三コレクションを中心に、まとまった数の横井作品が所蔵されていることは、当館がこの地域の洋画を研究する上で大きな利点と言えるだろう。今回は横井と木村の交流に主眼を置いたが、今後も横井礼以の研究を折を見て進めていきたいと考えている。

付記：

本稿を準備するにあたって名古屋市美術館の近藤将人氏には、同館所蔵の資料を調査する際に大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

愛知県美術館研究紀要 第32号 木村定三コレクション編

2026年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>



制 作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.32

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2026

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.

© 2026 Aichi Prefectural Museum of Art, All Rights Reserved.